一般社団法人 全国農協観光協会 ニュース

緑をつなぎ、笑顔をつなぎ、未来へつなぐ。

つなぐ

TSUNAGU NUMBER 18

全国農協観光協会機関紙 つなぐ TSUNAGU 2018年8月発行［VOL.018］

＼ 今年度は盛りだくさん！ ／

第1回民俗芸能Now！ in しまね
第30回民俗芸能と農村生活を考える会
開催します！

全国各地の民俗芸能を東京へ招待し、公演をおこなう「民俗芸能と農村生活を考える会」。今年度で第30回目の開催となります。平成28年度より3年間にわたって、東日本大震災の被災地を応援しようと試みを続けてまいりました。

一昨年度は岩手県大船渡市の「浦浜念仏剣舞」と「金津流浦浜獅子踊り」を、昨年度は宮城県登米市の「上町法印神楽」を招き、当日までの下準備から当日の会場運営、開催後の調整まで、それぞれの保存会のみなさまや市役所をはじめとする行政関連のみなさまと連携しておこなってきました。あわせて、ご来場くださったみなさまに、各地域の特産品をお手にとっていただけるよう、JAや観光協会などのご協力をいただきながら、販売会も実施しました。

昭和58年には、郡山市の重要無形民俗文化財に指定された

今年度は福島県郡山市から「柳橋の歌舞伎」を招き、日本教育会館にて催しを開きます。

今回公演いただく「柳橋の歌舞伎」は江戸時代から福島県の柳橋地区に受け継がれる歴史ある芸能。保存会のみなさまを中心に、地元の御舘中学校の生徒さんによる継承も進んでおり、地域一体となり存続のための活動を続けています。

この歌舞伎の特徴は、演者が全員柳橋地域に住んでいることや、200年以上前からの道具を今も大切に受けついでいることが挙げられます。

第1回「民俗芸能Now！ in しまね」の告知ポスター

3年間の取り組みを通じた震災復興支援の集大成として、また、第30回目の節目の開催として、今年度も素晴らしい公演のサポートができればと考えております。

また、10月下旬には、第1回「民俗芸能Now！ in しまね」（下記コラム参照）を開催。「民俗芸能」と「地元愛」をテーマに、地域を元気にするための取り組みを進めます。みなさま、ふるってご参加ください。

第30回 民俗芸能と農村生活を考える会

［ 開催概要 ］

とき	平成31年2月16日（土）
ところ	日本教育会館 一ツ橋ホール（神保町A1出口より徒歩5分）
入場料	無料
演目	一ノ谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）

※座席の申し込みに関しましては10月中旬ころ開始する予定です。

開催迫る！

第1回民俗芸能Now！ in しまね

10月27日に第1回「民俗芸能Now ！ in しまね」が開催されます。津和野町の民俗芸能である「弥栄神社の鷺舞（やさかじんじゃ さぎまい）」や「日原奴道中（にちはらやっこどうちゅう）」「青原奴道中（あおはらやっこどうちゅう）」が松江に勢ぞろい。東京大学名誉教授で社会教育学やコミュニティー形成を研究する佐藤一子（かつこ）先生の講演や、県立津和野高校の生徒による意見発表などもりだくさん。詳しくは、ホームページ（http://www.znk.or.jp/event/）をご覧ください。

開催にあたって、津和野町長の下森博之さん（左）から激励の言葉を受けた清水清男代表理事専務（右）

発行／一般社団法人 全国農協観光協会　発行人／清水清男　編集人／木本和男
〒101-0021 東京都千代田区外神田1-16-8 Nツアービル4F TEL03-5297-0321 FAX03-5297-0260

「原点回帰」と新たな挑戦

左から市場さん、木本さん、内藤さん

温故知新の精神

「四半世紀前にあの可愛い花の舞を舞った子どもたちが結婚し、子どもが出来て、孫の世代が祭りに登場し始めています」今年25周年を迎えた「東京花祭りの会」の事務局（東京都小平市）から届いた葉書には、そう記されていました。

実はこの会が発足したのは、全国農協観光協会が続けてきた「民俗芸能と農村生活を考える会」がきっかけ。平成5年に、愛知県東栄町の「御園（みその）の花祭り」を東京に招いて公演してもらった第4回を会場で見た小平市の方が、地元で同じような会を開こうと発奮したことから始まったそう。その後も順調に回を重ね、今では当時のメンバーの子や孫にあたる若い世代が祭りを担うほどに成長しています。

「一般社団法人としての強みや機能を発揮した、本会の原点ともいえる事業」と、木本和男総務部長が話す通り、この取り組みは民俗芸能を切り口に農村と都市の交流を図る公益事業として、この30年間、ずっと続けられてきました。入会4年目となる主任の市場悠介さんは、「民俗芸能に取り組む人の熱い思いに圧倒されっぱなし」と話します。

四半世紀を越えて継続してきた事業の原点を見つめ直しながら、新たな形に挑戦する――それは、全国農協観光協会全体の姿勢の表れに見えます。

元々は、農山漁村の余暇に関する調査研究を主業の一つとして設立された同会。平成28年度の機構改革で、総務部内に調査研究課を設け、平成29年には「成熟社会における新たなグリーン・ツーリズムの提案」という報告書も発刊しました。

「今後は、観光や旅行をテーマにした地域振興の調査研究に一層力を入れていきます」と、専任マネージャーの内藤丈晴さんは話します。

いわば「原点回帰」とも見える潮流と同時に、系統組織内ではいち早くSNSを導入したり、ユーザーインターフェイスを大幅に改善したHPの刷新など、新たな取り組みにも挑戦。これらを可能にしてきたのは、若い世代の声と現場の意思を尊重し、支えていくことを決意したベテラン勢の思いがあってこそ。

「都市農村交流」「教育研修」「調査研究」という3つの柱を主軸に、事業を展開する同会。その目線の先には「都市と農村の交流を通じて地域を元気にしたい」という職員全員の意思が見えます。その地歩を固めるものこそ原点回帰、そして新たな挑戦――。いみじくもそれは、今まさに自己改革に取り組んでいるJAグループの、全ての組織に必要な行動指針ともいえるかもしれません。

平成29年発行『成熟社会における新たなグリーン・ツーリズムの提案』

TSUNAGU TOPICS (No. / 3)

Group. 総務部調査研究課

レポート＝常瀬邑泰（2-4p）
農業ジャーナリスト
Report:Tokose Murayasu

TSUNAGU TOPICS（No. / 1）

Group. 事業部第1グループ

「当たり前」の価値を再発見

1

2

1.JA邑楽館林女性会と食糧学院とのコラボ。なにげない会話から笑顔が生まれる2.手前から安田さん、川嶌さん、平川さん、浅見さん3.収穫作業の合間の1枚。心地よい汗を流して表情が和らぐ援農企画参加者のみなさん

3

「当たり前」をかけあわせて生み出す化学反応

「初めて一面のりんご畑を見て、感動しました」そう話す平川萌々子さんは入会2年目。宮崎県育ちなので、マンゴーなどは身近でしたが、寒冷地を主産地とするりんごは、店頭で見るのが当たり前でした。平成29年6月、援農企画の添乗業務で長野県のりんご農家を訪ね、りんごの摘果作業に汗を流したことを振り返り、「全てが新鮮で、発見の連続だった」と話します。その思いは参加した人たちも同じだったようで、「摘果しないと実は大きくならないのね」「日光が当たらないと、りんごって赤くならないんだ!」と話しながら、りんごが店頭に並ぶまでの知られざる生産者の苦労に驚いていました。

一方、受け入れ農家では、「自分たちにしてみれば普段通りの作業なのに、こんなにいきいきと作業してくれるなんて……」と、新鮮な発見と驚きがあったようです。

同じような体験は、入会6年目のチームリーダー・川嶌守さんにも。平成28年に群馬県のJA邑楽館林女性会が、東京の専門学校食糧学院とコラボして地元の食材を使ったレシピを開発する企画を進めたときのことです。女性会の人たちにとっては普段の家庭料理が、東京の専門学校生には熟練の知識と腕前に映りました。一方、専門学校生たちの柔軟で先入観に捉われない斬新な発想が、女性会にとって新たな発見やアイデア創出のヒントになったり。「そんなマッチングが成功して、それぞれの立場で喜んでもらえて、交流が深まる、このダイナミズムが面白い」（川嶌さん）

同会は、平成30年4月の機構改革で、それまで体験交流課と地域交流支援課に分かれていた部門が一つになり、事業部第1グループが誕生しました。浅見茂樹グループ長代理は、「より深く地域と一体になって、都市と農村の交流事業を進められる体制ができた」と話します。安田晃一グループ長は、「地方の人が普段当たり前に見ている風景や農産物が、都市住民にはこの上ない魅力になるということに気づいてほしい。それが地域を活性化させる宝になり、私たちの仕事はそのきっかけを作ること」と、話します。

各地の「当たり前」を掘り起こし、その価値を再発見する――それが同グループのめざす地域振興・活性化方策の一つの答えなのかもしれません。

食糧学院とJA邑楽館林がコラボして作られたレシピ。直売所などで配布した

TSUNAGU TOPICS（No. / 2）

Group. 事業部第2グループ

「現場」の声をとことん形に

「現場」至上主義

「農泊やインバウンドの市場が拡大し、JAや自治体は、旅行客対応に迫られる場面が増えるでしょう」と話すのは福井伸之グループ長代理。「そんな情勢のなか、本会が実施する旅程管理研修会や旅行業務取扱管理者国家試験対策講座、観光人材育成事業などへの注目が高まります」と続けます。なかでも公益事業として展開する旅程管理研修会は、毎年全国30都市以上で実施、国内に39ある登録研修機関でもトップクラスの実績です。

一方で、農業への関心を高める事業も展開します。「最初は中学生向けの検定で、豆苗栽培キットもそのために開発しました」。平成25年に始めた日本農業検定について、シニアマネージャーの松田典行さんは話します。JAグループや民間企業からも申し込みがあります。「新入職員など、JAに勤めながら農業を知らない職員が多い」――JAの現場から、そんな声がよく聞かれます。

「検定を受けたことで、若い職員と組合員との会話のきっかけが生まれたという声が寄せられています」（松田さん）

このように全国農協観光協会は、「現場」の声を重視し、取り組みを進めます。このような風土は、どこからくるのか。興味深いエピソードがあります。

入会6年目となるチームリーダーの太田早紀さんが、都内の中学校を訪れたとき、農業クラブの顧問教諭から、

「他の部活と違い、大会もないんです。みんなすごく熱心なのに……なんとか彼らをひのき舞台に立たせてあげたい……」

という話を聞きました。

早速、太田さんは職場に戻り、そのことを会議の議題に。そこで出たのが「栽培コンテストをやろう!」という企画です。全国の中学校と特別支援学校に募集をかけ、趣向を凝らした農作物の栽培を競い合い、グランプリを決めるというもの。

「どれだけ集まるかわからず、ドキドキですよ!」と太田さんは苦笑しますが、「ゼロから知恵をしぼり企画を打ち出し、形にできる職場はめったにない。働きがいがある」と話します。

若い世代の現場感覚やアイデアを尊重し、上の世代はそれをサポート。そんな同会の姿勢がよく表れています。「こんなことしたら面白いんじゃない?」というアイデアがどんどん生まれ、次々と形になっていく。そんな職場だからこそ、地域やJA、農家の人たちの「現場」の声に真摯に耳を傾け、形にしていくことができるのでしょう。

オフィス内では、キュウリの栽培を実践中

左から太田さん、松田さん、福井さん